

## 飯島賢二の『恐縮ですが…一言コラム』

### 第 477 回 真偽のほどは？～小沢一郎～

2012.6.17

出張先へ向かう車中、週刊誌の記事を読み、衝撃を受けた。

それは「週刊文春」(6月21日号)の記事である。

「小沢一郎 妻からの『離縁状』」とのタイトルで、民主党の小沢一郎元代表(70)の妻、和子氏(67)が支援者に宛てた手紙を、そのまま全文公開したというもの。

筋金入りの「小沢嫌い」松田賢弥氏の投稿と合わせて、かなりのボリュームとショッキングな内容だった。やや出刃亀的ではあるが、これが事実なら…恐ろしい話である。

小沢氏と和子夫人は73年、田中角栄元首相の紹介で結婚、実家は新潟のゼネコンの雄・福田組だ。小沢氏が91年に心臓の病気を患った後、夫人は野菜中心の愛妻弁当を持たせて、活動を支えた。

しかし、8年前に小沢氏に隠し子の存在が分かった。

ここからは週刊誌お得意の怨念の、スキャンダラスな世界である。

紀尾井町の料亭「満ん賀ん」の女将とのラブロマンスから、別の若いタレントに産ませたという「隠し子」の存在。しかも何年か経って「満ん賀ん」の女将だった愛人がその子を引き取ったという、信じ難い話。その事実が明らかになった時、小沢氏から和子夫人への謝罪はなかった。それどころか、「あいつとは別れられないが、お前となら別れられるからいつでも離婚してやる」と告げられた。どうも、この痴話話話が原点にありそうだ。

更に手紙では、「小沢は放射能が怖くて秘書と一緒に逃げ出しました」と、震災直後の小沢氏の行動を最も近くにいた妻の立場から批判。たとえばこんな調子である。

…3月11日の朝、北上出身の第一秘書のAが私の所に来て、「内々の放射能の情報を得たので、先生の命令で秘書達を逃がしました。私の家族も既に大阪に逃がしました」と胸をはって言うのです。あげく、「先生も逃げますので、奥さんも息子さん達もどこか逃げる所を考えて下さい」と言うのです。私は仰天して「国会議員が真っ先に逃げてどうするの！内々の情報があるならなぜ国民に知らせないのか」と聞きました。(略)

天皇・皇后両陛下が岩手に入られた日には、(小沢は)千葉に風評被害の視察と称して釣りに出かけました。千葉の漁港で風評被害がひどいと陳情を受けると「放射能はどんどんひどくなる」と発言し、釣りを中止し、漁港からもらった魚も捨てさせたそうです。風評で苦しむ産地から届いた野菜も放射能を恐れて鳥の餌にする他は捨てたそうです。かつてない国難の中で放射能が怖いと逃げたあげく、お世話になった方々のご不幸を悼む気も、郷土の復興を手助けする気もなく、自分の保身の為に国政を動かそうとするこんな男を国政に送る手伝いをしてきたことを深く恥じています。…(同文春より)

小沢氏が実際に被災地に入ったのは今年の1月が初めて、震災から10ヵ月後だった。それまでは被災現場には行っていないようだ。

これが発端で離婚に踏み切ったとしている。仮に本当であれば、妻に、男としてはもちろんだが、政治家としてここまで完膚無きまでに批判された代議士は聞いたことがない。政治家としての資質が問われかねない大問題だ。

私自身、小沢一郎という政治家に対するイメージは、完全に叩き壊された。

政治家としてどころか、男としても、愚劣極まりない、人間失格である。

通常、週刊誌の特ダネ記事は、発売日前日の午後にゲラや見本誌出回することで内容が広まるようである。ところが、今回の話題の広まりかたは異例だった。

週刊文春の公式ウェブサイトにも6月13日18時過ぎ、手紙の内容を引用しながら記事の概要をまとめた文章が掲載されたのだ。このサイトの内容は、現時点で1万3,000回以上ツイートされ、フェイスブック上では3万2,000回以上「いいね！」ボタンが押されている。ネット媒体としては、特異とも言える注目度の高さだ。

しかし、これほどの衝撃ニュースが、大手メディアでは、どういう訳か無視され続けている。テレビの地上波は完全に「黙殺状態」、一般紙は産経新聞が報じた程度だった。夕刊紙は対応が分かれた。夕刊フジは、1面トップで「小沢致命傷」との見出しを掲げ、いいかげんさが売りの東京スポーツも、「小沢グループのダメージは!？」と題して社会面で報じている。一方、小沢氏を擁護する論調で一貫している日刊ゲンダイは、「女房が『バクロ女』に変わるとき」と題して、その信憑性を疑い始めた。

政治家やマスコミ、芸能界の常識は我々のものとはかけ離れている。

民主党内の勢力抗争、消費増税による民自公大連立構想、小沢氏の疑惑裁判、福田組&小沢氏と中国との関係、尖閣列島買収問題等、小沢氏の周辺には誰よりも多くの「ネタ」があり、野田総理以上にマスコミの絶好のターゲットであること、間違いない。魑魅魍魎たる世界のこと、この記事の真偽のほどは知る由もないが、タイミングが実に微妙である。

しかし、もしこの記事が「ガサネタ」であった時、文春か、松田氏か、誰が、どう、責任を取るのだろうか、その時は正義も善悪も、責任も全くない、無節操な似非(えせ)ジャーナリズムでしかないこと、覚悟しなければなるまい。

6月14日発売の週刊文春が小沢和子氏の手記を掲載したことから、ネット上では、それに関する書き込みが殺到している。コンビニや書店でも文春の売り切れ店が続出しているという。現在入手困難になった週刊文春6月21日号は、ヤフオク(Yahooオークション)に出品されている。

どうもこのことだけは事実のようだ。

笑いが止まらないのは、(株)文藝春秋だけか？